慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伝小倉公脩筆『古今和歌集』零本：解題と翻刻
Sub Title	Bibliographical introduction and reprint of the odd volume Kokinwakashu attributed to the hand of Ogura Koshu
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1998
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.33 (1998.) ,p.271- 320
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000033-0271

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

伝小倉公脩筆『古今和謌集』零本　解題と翻刻

川上新一郎

はじめに

ここに紹介翻刻する伝小倉公脩筆『古今和歌集』零本一帖は平成八年古典籍下見展観入札会に出品されたもので、現在は家蔵となっている。恋部巻十一から十五までの零本であるが、定家本とは異なり、西脇家蔵飛鳥井雅経筆本[1]と同系統の本文を有している。また、本文を検討すると雅経筆本の転写本とも考え難く、新院御本の本文を考える上でも一資料となりうる。

以下はその解題と翻刻である。

古今和謌集存巻十一―十五

〔鎌倉末〕写・伝小倉公脩筆　一帖

綴葉装。表紙欠。現在、見返しに貼込まれていた遊紙が、前後の表紙代りになっている（二三・六×一六・六糎）。表紙に後人の書入れがあり、中央に「紙数七拾五枚」、左肩に「小倉殿公脩筆」とそれぞれ打付書する他、右肩に貼紙し「小倉殿公脩／ハシタ本□□不足」等と墨書する。極札の類はない。料紙、斐楮交漉紙。墨付、七五丁（詳細後述）。遊紙、前一丁、後なし。字面高さ、約一九・〇糎。毎半葉七行（時に八行、稀に九行）、和歌二行書。内題「古今和謌集巻第十一（―十五）　恋謌一（―五）」と部立までを一行書とする。ただし、巻十五は「巻」を欠き、恋部の三より五は「哥」を用いる。零本で巻末を欠くため奥書識語の類はなく、裏表紙代りの一紙の表左下に

「すみ付七十五枚」とある。朱点による声点が付されるが、清濁を示すのみで、文字の左に一点注記（清音）もしくは二点注記（濁音）が施される。後述するように、本書には後人による定家本との校合書入がなされているが、あるいは声点も後人の所為かと疑われる。

本書は巻十一より十五までの恋部を完存する他、巻二十、1073―1079上句を含む一葉が中途に誤って綴込まれている。以下説明を加える。本書は五折からなり、第一折より第四折は各九枚十八丁よりなっている。第一折の最初の一丁は本来表紙見返しにあったと思われ、現在は表紙代り、第二丁は遊紙で、第三丁表より本文となっている。第五折は六丁からなるが、第一丁と第六丁（現裏表紙）、第四丁と第五丁が対応しており、第二、第三丁は対応する丁がなく、第三丁が誤綴された巻二十の一葉である。また、第三丁を外すと本文は欠落なく連続する。従って本来第五折は三枚六丁よりなり、第二丁に対応する一丁が現在の第五丁の次に遊紙として存在し、次の第六丁は裏表紙見返しに貼込まれていたと考えられる。

すると、本書は古今集を四分冊した第三冊に当り、元はこれだけで一冊に装訂されていたことになろう。

書写年代は鎌倉末もしくは南北朝初と思われ、伝称筆者である小倉公脩（一三四―一三七）の年代と矛盾するものではないが、もとよりその証はない。[2]

全巻一筆であるが、他に後人による定家本との校合書入がかなり詳細に施され、本来存在したと思われる傍書と弁別し難い箇所があり、書写面は錯綜している。また、後人書入も一回一筆限りとも断定出来ず、原態の推定に迷うところがある（後人書入は室町期であろう）。従って、検討の対象となる本文は本行及び初めから存したとみられる若干の傍書ということになる。

まず注目すべきは、内題が部立まで一行に書かれていることである。この点は以前にもふれたが、[3]定家本（俊成本も）は部立を改行する形式をとるため、一行書形式は非定家本の可能性が高い。本書も校合してみると、定家本でないことが判明する。

排列を見ると、異本歌はなく、次の異同がある。

797 いろみえてうつろふ物はよの中の　　こまち
　人のこゝろのはなにそありける　　よみ人しらす

800いまはとてきみかくれなはわかやとの
花をはひとり見てやしのはん
むねゆきのあそん
801わすれくさかれもやするとつれもなき
人のこゝろにしもはおかなん
よみ人不知
798我のみやよをうの花となきわひん
人のこゝろのはなとちりなは
そせいほうし
799おもふともかれなん人をいかゝせん
あかすちりぬる花とこそみめ
寛平御時御屏風に哥かゝせ給ける
ときよみける
そせい
802わすれくさなにをかたねとおもひしは
つれなき人のこゝろなりけり
（傍書省略）

この排列をとるのは雅経筆本のみである。雅経筆本には次のごとくある。

歌次第イ本モ如此（朱）
こまち
797一（朱）いろみえてうつろふものはよのなかの人のこゝろのはなにそ
サリケルイ（朱）ありける
よみひとしらす
800四（朱）いまはとてきみかくれなはわかやとのはなをはひとりみてや
しのはん
むねゆきのあそん
801五（朱）わすれくさかれもやするとつれもなき人のこゝろにしもはお
クトモイ（朱）かなん
よみひとしらす
798二（朱）われのみやよをうのはなとなきわひむ人のこゝろのはなとち
りなは
そせいほうし
799三（朱）おもふともかれなんひとをいかゝせむあかすちりぬるはなと
こそみめ
寛平御時御屏風に歌かゝせたまひけるときよみける
テカキケルイ（朱）
そせい

802わすれくさなにをかたつね(マヽ)とおもひしはつれなき人のこゝろなりけり

これによれば雅経筆本は797 800 801 798 799 802の排列をとり、朱にて通常の排列に改め、更に「歌次第イ本モ如レ此」と注記している。「イ本」とは清輔本であることが奥書により明らかで、本文校合の結果もそれを裏付けている。

この箇所の雅経筆本の排列と注記について、久曽神氏は「それは「七九八」「八〇〇」が共に読人不知である為書誤つたのであり、その順序を歌の上に記して訂正してゐる。」（久曽神氏前著37頁）と述べられている。797の次に800 801の二首を挿入する排列は他に例を見ないものであるので、単純な誤りに起因する可能性が高い。しかし、さればと言って雅経筆本が書写の際目移り等で誤り、すぐ気付いて朱注したものではない。

なぜなら、小松氏著書に掲げられた書影によれば、雅経筆本は朱墨で書かれているのではなく、底本の朱書を「本ハ朱ニテ付タリ」のように墨注記で示しており、朱は用いられていないからである。この点は久曽神氏前著凡例にも「祖本に朱書たりし旨、原本に明記せられたるところは、すべて太字を用ゐたり。」と明らかにされている。つまり、797－802の排列が仮に単純なる書誤りによるものとしても、それは雅経筆本が犯したものではなく、その底本にもそうなっており、排列訂正の朱注も既に施されていたと考えるべきであろう。このことは、雅経筆本の訂正前の排列を有する本が一段階前に少なくともう一本存在したことを意味する。

そして今回、訂正の注記のない同排列の伝本の出現により、この排列が、結局は書写の誤りによるものとしても、書写して直ちに誤りに気付いて訂正注記したという単純なものでなかった可能性も生じよう。

それは延いては、伝小倉公脩筆本が雅経筆本の転写本でない可能性をも示唆しえよう。雅経筆本が転写をくり返せば、通常の排列に改められてしまうか、さもなくば注記を保存するのが普通と考えられるからである。もちろんそれは蓋然性の問題にすぎず、転写本である可能性を否定するものではない。

さて、次に字句の異同である。既に797－802の箇所にも伝公脩筆本は定家本と異なる点がある。上段が伝公脩筆本、下段が定家本[4]である。

797　こまち－小野小町

800　きみかくれなは－君かゝれなは
798　よをうの花と－世をうくひすと
802　よみける－よみてかきける
同　そせい－そせい法し

また、そのことごとくが雅経筆本と一致している。中でも、「きみかくれなは」「よをうの花と」「よみける」は本書と雅経筆本のみの共通異文である。

以下、本書が定家本と異なり雅経筆本と一致する例を挙げる。本書は本行のみをとり、見せ消ち、補入等の二次的本文は一切無視し、雅経筆本も本行のみを対象とする。上段が本書、下段が定家本である。

473　人をまつかな－年をふる哉、476　さこん－右近、478　かすかのまつりのつかひに－かすかのまつりに、同　をひてくる－おひいてくる、482　あふことのくものはるかに－逢事はくもゐはるかに、484　ゆふくれの－夕くれは、同　ひとこふるみは－人をこふとて、487　かけぬひそなき－かけぬ日はなし、489　こひぬ日そなき－こひぬ日はなし、493　なそわか恋の－なとわかこひの、508　ものおもふころを－物思ころそ、510　くるしくのみや－くるしとのみや、512　たねしあらは－たねしあれは、516　かたしらす－方もなし、同　いかにねしかは－いかにねし夜か、526　ゆめにみゆるは－夢に見えつゝ、528　そはぬものから－そはぬ物ゆへ、529　あらぬものから－あらぬわか身の、530　かなしきは－わひしきは、539　こたえぬそらは－こたへぬ山は、549　恋をせさらん－こひすしもあらむ、551　けぬかといはん－けぬとかいはむ、556　真せいか－真せい法しの、564　わひしかりける－こひしかりける、568　こゝろみん－心見に、同　あはんてはなん－あはむといはなむ、569　ゆめてふものそ－夢といふ物そ、572　色はれなまし－色もえなまし、578　ものやわひしき－物やかなしき、584　いふ人もなし－いふ人のなき、587　つねよりもなをふかきわか恋－つねよりことにまさるわかこひ、592　たきつせのねさしとまらぬ－たきつせにねさしとゝめぬ、606　われのみそきく－我のみそしる、607　したになかれて－したにかよひて、616　つひたちに－ついたちより、同　ものいひて－ものらいひて、617　ふちはらのとしゆきの朝臣－としゆきの朝臣、621　きへぬへき哉－けぬへき物を、同　かきのもとの人丸か也－柿本人麿か哥也、622　あきゝりに－秋のゝに、627　あふことのなき－逢事なきに、631　またきなきなは－又もなきなは、632

まもらせけれは―まもらすれは、同　かへりきて―かへりて、
635　こまち―をの、こまち、同　あきのよは―秋の夜も、644
　人にあひてのあしたに―人にあひてあしたに、645　伊勢
のくに、かりのつかひにまかりける時―伊勢のくに、まかり
たりける時、646　こよひさためよ―世人さためよ、649　わ
かなもた、し―わかなもたてし、652　したにやおもへ―した
にをおもへ、653　したゆふそての―したゆふひもの、656　さ
こそはあらめ―さもこそあらめ、同　みるかすへなさ―見る
かわひしさ、657　おもひのまにま―思ひのま、に、同　ゆめ
ちをさへは人もとかめし―ゆめちをさへに人はとかめし、668
　色にいてぬへく―色にいてぬへし、669　こきてなん―こき
いてなむ、670　さたふん―平貞文、680　もゆるわか身を―も
ゆるわかこひ、692　つけやらん―つけやらは、695　かきねに
さける―かきほにさける、699　われこひめやは―わかこひめ
やは、702　あふみのうねへに―あふみのうねめに、703　かへ
しにたてまつりける―返しによみてたてまつりけるとなむ、
706　女―ある女の、同　つかはせりける―つかはしける、同
　とまらねは―なりぬれは、708　すまのうらに―すまのあま
の、709　みえぬれは―なりぬれは、710　た、こ、にのみ―た、
こ、にしも、714　そせい―素性法師、717　わすれなめ―、なれなめ、722　そせい―そせい法し、同　うはなみはたて―あたなみはたて、731　ふるひとみれはそてそひちぬる―ふる日となれはそてそぬれぬる、733　あはにうきなん―あわとうきなむ、734　むか。へに―いにしへに、735　人はしらすや―人しるらめや、737　こむ院のおほいまうちきみ―近院の右のおほいまうちきみ、740　侍けるときに―侍ける時、742　こと つてのなき―ことつてもなし、747　とうかあまりはかりになん―とをかあまりになむ、同　、もひいて、―こひて、同　よめりける―よめる、754　めならふ色の―めならふ人の、同
　わすられにけん―わすられぬ覧、755　おひてみたる、―おひて流る、761　われそかすかくきみかこぬ夜は―君かこぬ夜は我そかすかく、767　われやいをぬる―我やいをねぬ、769　なかむるやとの―なかめふるやの、770　僧正へせう―僧正へんせう、773　わひしきものを―わひにし物を、784　よみておくりける―よみてつかはしける、789　たち花のたかつねの朝臣むすめ―藤原高経朝臣女、同　ふもとよりのみかへりきぬ―ふもとを見てそかへりにし、791　ものへまかりけれはのちに―ものへまかりけるみちに、800　きみかくれなは―君か、れな

は、798　よをうの花と－世をうくひすと、802　よみける－よみてかきける、同　そせい－そせい法し、803　けんけいほうし－ナシ、同　なにをうしとて－何をうしとか、804　つらゆき－きのつらゆき、807　人はうらみし－世をはうらみし、808　もとよしのおほきみのむすめ－もとよのおほきみの女、812　いとん[6]たえぬる－もはらたえぬる、814　人そなき－方そなき、1073　しつは山－しはつ山、1074　かみのみむろに－神のみまへに、1076　人もみるかね－人も見るかに

本書が雅経筆本と異なる例をまだ示していないので、これだけでは決定的な証拠とは言えないかもしれないが、雅経筆本のみとの共通異文も多く、本文の類似は疑いようもない。

本稿の主題ではないが、この異同の多さを見るにつけ、同じ新院御本を祖本とし、さして転々と書写された訳でもないにかかわらず、雅経筆本と定家本はあまりに違いすぎていると思わざるをえない。定家による校訂を考慮しても、右の異同の多くがそれであるとは到底思われず、また、定家本を俊成本に置き換えても、右の結果にさしたる違いはないのであるから、不審という他ない。

ただ、雅経筆本には清輔本との校異以外に傍記本文がかなり存在し、それが定家本に一致する例は少なからずあるので、その辺りが解決の鍵なのかもしれない。伝小倉公脩筆本にも後人の所為とは思われぬ傍記本文がままあり、その傍記本文は必ずしも雅経筆本と一致しないが、何がしか新院御本の書写状況をうかがわせるものがありそうである。

次に伝公脩筆本が雅経筆本と異なり、定家本と一致する例を挙げる。上段が本書、下段が雅経筆本で、傍書等を無視するのは同様である。

479　恋しかりけれ－さひしかりけり、562　ゆふされは－ゆふさりは[5]、575　そせいほうし－そせい、609　みはてぬゆめの－みはてぬゆめを[6]、663　色にいてめや－いやにいてめやは、709　はふきあまたに－はふきのあまたに、720　こゝろあるとや－こゝろあるにや[7]、同　この哥－このうたの、同　あつま人－あつまつ、747　もとのみにして－おなしみにして[8]、757　あきならて－あきならす[9]、787　そらになる覧－そらにちるらん[10]、802　なにをかたねと－なにをかたつ(ママ)ねと、817　あらをたを－あらをたに、1076　まきもくの－まきもくき(ママ)の

以上のごとく数もすくなく、その中には雅経筆本の明らかな誤りとみなされる箇所もあり、雅経筆本の傍書と一致する例も

多く、大きな異同はないとして誤りない。

次に、伝公脩筆本が定家本、雅経筆本のいずれとも一致しない例を挙げる。その中には、本書の明らかな誤脱も含まれるので、それらをまず列挙する。それらの多くは、見せ消ち、補入等により本文が正されているが、ほとんどが定家本と校合した後人の所為とみなされるので、補訂は採用せず誤りとして掲げる。

520　はやなりなんみのまへに、540　かたらは、556　ことはをたによみて、562　もれとん(も)、564　きえかりてそ、577　ひちにしかも、594　おもひめけん、603　つねきものと、614　あらてとしふる、623　あしたゆく覧、645　あしたにまた、同　をりけあひたに、676　ちりならなの、703　たんとおもふな、709　たえぬことの、731　はるのひの、743　なかめちるらん、749　藤原のかけすけの朝臣、781　のかせをさむ、783　「かへし」ナシ、808　とくるひもしかな、824　よみひとしす、1073　かさしゆくのしまこきかくる

以上、誤脱の箇所が多いようにも思われるが、補訂の中には同筆かと疑われるものもあり、必ずしも誤りが多いとは言えない（詳細は翻刻の注記を参照されたい）。

右を除いて、本書が定家本、雅経筆本いずれとも異なる例を挙げる。上段が本書、下段が雅経筆本で、定家本、雅経筆本が一致している場合は、末尾に*を付す。

参考のため、久曽神昇氏『古今和歌集成立論』により本書と本文が一致する主要な伝本を検索し、括弧内に略号で掲げる。なお、伝公任筆本は小松茂美氏編『伝藤原公任筆古今和歌集』（平7刊）による。使用する略号は以下の通りである。

大江切（江）、志香須賀文庫蔵花山法皇御本（花）、基俊本（基、校合が一致する場合のみ）、筋切（筋）、元永本（元）、唐紙巻子本（唐）、関戸家本（関）、雅俗山庄本（俗）、志香須賀文庫蔵伝後鳥羽天皇宸筆模写本（後）、今城切（今）、俊成建久二年本（建）、寂恵本（恵）、中山切（中）、伝公任筆本（公）

清輔本共通（清）、六条家本（六）、天理図書館蔵片仮名零本（零）、寛親本（静）、宮本家本（宮）、尊経閣本（尊）、伏見宮旧蔵一本（伏一）、伝顕昭筆本（伏）、天理図書館蔵伝家隆筆本（天）

471　いはなみはやく―いはなみたかく*、476　こひしきは

（花基元唐、中「こひしくは、」六「こひしきは」）－こひしくは＊、479　よみて（宮）－のちによみて＊、481　ものおもふかな（花元今中六宮尊）－ものをおもふかな＊、500　したもえにせん（花基恵六宮尊、中「したもえにせん」）－したもえをせん＊、511　なかみなかみを－なにみなかみを＊、525　たのめつ、（尊）－たのみつ、＊、548　ほのうへてらす（花元俗今中清）－ほのうへをてらす＊、549　なとかほにて、（元）－なとかほにいて、＊、580　たちゐるそらも－たちゐのそらも＊、593　からころも（基後公）－かりころも＊、596　なをこほりつ、－なをこほりけり＊、612　ひこほしの（元六）－ひこほしも＊、617　なりひらの家なりける－なりひらのあそんのいへなりける、637　なにそわひしき（江元唐後「なるそわひしき」）－なるそかなしき＊、650　あらはれて（中六尊伏一伏天、零「アラハレテ」）－あらはれは＊、669　みるめすらなし－みるめすくなし＊、670　なきものを（江元唐零）－なきこひを＊、687　おもひそめてし（花中天）－おもひそめてん＊、694　露をもみ（静）－つゆをおもみ＊、697　やまとにあらぬ－やまとにはあらぬ＊、702　このうた（江花基建公六尊）－このうたは＊、705　ふみつかはしける（花公静、六「ふみつかはしける」）－ふみつかはせりける＊、722　そこふかき－そこひなき＊、728　みをははなれは－みをははなれす＊、732　恋わたるらん（花六宮）－こひわたりなん＊、733　わたつみの（公）－わたつみと＊、739　まてとは、－まて、は、、744　なにかせん－なにせんに＊、745　ものいひける（花基俗建）－ものらいひける＊、747　かくれにけるに－かくれにける＊、748　ほにて、－ほにいて、＊、753　くまもなくなきたるあまの－くも、なくなきたるあさの＊、764　あさきこゝろは－あさきこゝろも＊、780　なりひらの（後恵公六、建「なりひらの」）－なかひらの＊、784　なりひらの朝臣の（花基）－なりひらのあそん＊、788　ことくさそ－ことのはそ＊、795　ものにそありける（筋元後、関公「ものにさりける」）－いろにそありける＊、812　ことんしりぬれ（花伏一）－こともしりけれ＊、1073　しまつ山ふり－しはつやまふり＊

右を見ると、大半が定家本と雅経筆本が一致している箇所の異文である。このことは伝公脩筆本が転訛した本文を有すると考えられなくもないが、一々の箇所の本文を見ると、独自異文もあるが、多くは他の伝本と共通異文を有するものであり、必

ずしも単純な転訛とは言えない。勿論転写をくり返す間に種々の要素を混入したとも考えられるわけで、中世の非定家本系伝本の様相を示すと言えるかもしれない。

次にこれまで具体的に触れてこなかった書入れ、校合、補訂について述べることとする。それらについては、これまでの論述では全て無視し、見せ消ちの訂正等にも一切従っていない。その理由は以下に述べる。

本書にはほぼ次の三通りの補訂が加えられている。

1、字句の補入。一見明白な脱字から、文意にかかわる数文字以上のものまである。

2、見せ消ちによる本文の抹消及び訂正。明白な書誤りの訂正から、歌句の変更にまで及ぶ。

3、本行、傍書のいずれかを見せ消ちにし、他に合点を付す。

これらの書入の多くが後人の所為と認められるが、本文と同筆かと思われるものも少なからずあり、全てを弁別するのは容易でない。

また、後人の書入れも、一部は薄墨、一部は普通の墨書で全て同時かつ一筆とも言い難い。ただし、両者の間に内容的な区別は認め難い。

さて、これらの校合の意味であるが、大半が定家本との校合による本文改訂であることは明らかである。1及び2の操作によって改訂される以前が雅経筆本に一致する本文であり、改訂後が定家本本文である。更に3の場合は、合点を付された方が定家本本文となっている。

この校合作業は比較的丁寧に行われており、一部校合もれもあるが、一貫してなされている。

定家本と校合がなされている証拠は、作者にまま定家本の作者注が書入れられていることである。つまり640「寵」に「一説ウツク、或本カク、一説チヨウ用之」、737「こむ院のおほいまうちきみ」に「能有、文徳源氏、右大臣左大将」、740詞書「中納言みなもとの、ほるのあそん」に「昇、延喜八年二月中納言、九年民部卿、十四年大納言」、769「さたの、ほる」に「貞朝臣登、備中守、仁明御子」、781「雲林ゐんのみこ」に「常康親王、仁明御子」、783「おの、さたき」に「貞樹」、807「ないしのすけ藤原のなをいこの朝臣」に「直子」、809「すかのた、おん」に「忠臣」とそれぞれ注記するのは「寵」の「或本カク」が出典不明である以外全て定家本との校合の結果書入れられたもので、筆跡もまた後人のものである。

3については具体的に説明すると左のごとくである。

512第三句は伝公脩筆本は「おひにけり」とあり、「おひにけり」の「に」の右肩に合点、「ぬへし」の左傍に見せ消ち符号があり、更に「おひにけり」の下に小字で「用之歟」とある。

これは、伝公脩筆本は本来「おひにけり」とあり（雅経筆本全同）、それを定家本と校合して、定家本と一致する「にけり」に合点を付し、傍書を見せ消ちし、念を入れて「おひにけり」の下に「用之歟」と注記したものと考えられる。

また、516初句は「よひ〳〵に」とあり、「ゆふくれは」の右傍に見せ消ち符号があり、その下に「不用之歟」とある。これは定家本は「よゐ〳〵に」であるから傍書を見せ消ちし、「不用之歟」と注記したのであろう。他の例からすると、「よひ〳〵に」に合点すべきであるが、ここでは省略したのであろう。なお、雅経筆本は「よひ〳〵に」となっている。

他の箇所の検討からも、ほぼ以上の法則が認められる。従って、本書においては見せ消ち訂正や傍書等本行以外の本文は一応別途に扱うべきであり、考察の対象から除外するのが安全である。ただし、補訂や傍書が全て後人のものとは言えず、雅経筆本と比較してみると、本行、傍書が共に一致している場合が珍しくない。しかしながら、その場合でも、必ずしも筆勢で傍書も同筆と認め難いこともあり、定家本との校合による偶然の一致とも考えられる。（本行、傍書いずれかに合点のある箇所の傍書は同筆の可能性が高い。）

結局、補訂と傍書については現段階では、確たる結論を出しえず、一々についても弁別し難いため、組版の都合もあって、本行のみを翻刻し、その他の書入れは全て注記で示すこととした。その際、同筆、別筆について触れた箇所があるが、それらは注意を促す目的にすぎず、全てを弁別しての発言でないことを承知されたい。

なお、朱の声点が本来のものか否かはにわかに判断出来ないが、1073「しまつ山ふり」の傍書「は」に濁声点があり、「は」は別筆と思われるため、声点も後人の所為と見るべきであろうか。この声点の存在も注記に譲った。

〔注〕

（1）久曽神昇氏『崇徳天皇御本古今和歌集』（昭15刊）により紹介された崇徳天皇御本のことである。翻刻は久曽神氏『古今和歌集成立論資料編下』（昭35刊）にも収め

られる。また小松茂美氏『古筆学大成』第三巻（平1刊）に書影がある。雅経筆本の引用は、久曽神氏の主として前著による。

（2）小倉公脩は正二位権大納言実教の二男。正二位権中納言に至り、建武四年（一三三七）二月十七日薨、四十四歳（『公卿補任』等による）。続千載集以下に七首入集する二条派歌人であるが、古筆切等の伝称筆者としては管見に入らず、本書のツレの存在も知らない。

（3）拙稿「清輔本古今集考（上）」（「斯道文庫論集」26平4・3）59－60頁参照。

（4）伊達家旧蔵本を用いるが、例示の採択に当っては冷泉家時雨亭叢書第二巻（平6刊）所収の嘉禄二年本、貞応二年本本文も考慮の対象とする。

（5）雅経筆本、「り」の右に傍書「れ」がある。

（6）雅経筆本、「を」の左に傍書「の」がある。

（7）雅経筆本、「に」の左に傍書「と」がある。

（8）本書、「もとの」の右に傍書「ヲナシ」（同筆）がある。

（9）雅経筆本、「す」の右に傍書「て」がある。

（10）雅経筆本、「ち」の右に傍書「な」がある。

凡例

以下は家蔵伝小倉公脩筆『古今和謌集』一帖（存巻十一－十五）の翻刻である。翻刻に際し以下の措置を施した。

1、本行のみを翻字し、見せ消ち訂正、本行の補記、傍書、書入れ、合点、声点等は採用せず、全て後掲注記に委ねることとした。

2、改行は底本通りとし、半葉ごとに」で示し、丁数を記した。なお、誤綴されている巻二十の一葉は丁数に入れず末尾に翻字した。

3、漢字は原則として通行字体に改めた。

4、歌頭に新編国歌大観番号を付した。また、1に関わる注記を有する場合、歌番号の右傍に＊を付した。必ず参照されたい。

古今和謌集巻第十一　恋謌一

たいしらす　よみひとしらす

469 ほと、きすなくやさつきのあやめくさ
あやめもしらぬこひもするかな

そせいほうし

470 おとにのみきくのしらつゆよるはおきて
ひるはおもひにあへすけぬへし」

きのつらゆき

471* よしのかはいはなみはやくゆくみつの
はやくそ人をおもひそめてし

ふちはらのかちをん

472 しらなみのあとなきかたにゆくふねも
かせそたよりのしるへなりける

ありはらのもとかた」1

473* おとはやまをとにき、つ、あふさかの
せきのこなたに人をまつかな

474 たちかへりあはれとそおもふよそにても
人にこ、ろををきつしらなみ

つらゆき

475 よの中はかくこそありけれふく風の
めにみぬ人もこひしかりけり」

さこんのむまはのひをりの日むかひに
たてたりけるくるまのしたすた

れよりをんなのほのかにみえけれは
よんてつかはしける

ありはらのなりひらの朝臣

476* みすもあらすみもせぬ人のこひしきは
あやなくけふやなかめくらさん」2

かへし　よみ人しらす

477 しるしらぬなにかあやなくわきていはん
をもひのみこそしるへなりけれ

かすかのまつりのつかひにまかれ
りけるときにものみにいてたりけ
る女のもとに家をたつねてつかはせ
りける　みふのた、みね」

478* かすかの、ゆきまをわけてをひてくる
くさのはつかにみえしきみはも

人のはなつみしけるところにま
かりてそこなりける人のもとに
よみてつかはしける
つらゆき
479* やまさくらかすみのまよりほのかにも」3
みてしひとこそ恋しかりけれ
たいしらす　もとかた
480 たよりにもあらぬおもひのあやしきは
こゝろを人につくるなりけり
をふしかうちのみつね
481* はつかりのはつかにこゑをきゝしより
なかそらにのみものおもふかな」
つらゆき
482* あふことのくものはるかになるかみの
をとにきゝつゝこひわたる哉
よみ人不知
483 かたいとをこなたかなたによりかけて
あはすはなにをたまのおにせん
484* ゆふくれのくものはたてにものそおもふ」4

あまつそらなるひとこふるみは
485 かりこものおもひみたれてわれこふと
いもしるらめや人しつけすは
486 つれもなき人をやねたく白露の
をくとはなけきぬとはしのはん
487* ちはやふるかものやしろのゆふたすき
ひとひもきみをかけぬひそなき」
488 わか恋はむなしきそらにみちぬらし
おもひやれともゆくかたもなし
489* するかなるたこのうらなみたゝぬひは
あれとん(も)きみをこひぬ日そなき
490 ゆふつくよさすやをかへのまつの葉の
いつともわかぬ恋もするかな
491 あしひきの山したみつのこかくれて」5
たきつこゝろをせきそかねつる
492 よしのかはいはきりとをしゆくみつの
おとにはたてしこひはしぬとん(も)
493* たきつせのなかにもよとはありてふを
なそわか恋のふちせとん(も)なき

494 やまたかみしたゆく水のしたにのみ
なかれてこひんこひはしぬとも」
495 おもひいつるときはのやまのいはつゝし
いはねはこそあれこひしきものを
496 ひとしれすおもへはくるしくれなゐの
すゑつむ花のいろにいてなん
497 あきのゝのをはなにましりさく花の
色にやこひんあふよしをなみ
498* わかその、むめのほつゑにうくひすの」6
ねになきぬへき恋もするかな
499 あしひきのやまほと、きすわかことや
きみにこひつゝいねかてにする
500* なつなれはやとにふすふるかやりひの
いつまてわか身したもえにせん
501 恋せしとみたらし河にせしみそき
かみはうけすそなりにけらしも」
502 あはれてふことたになくはなにをかは
恋のみたれのつかねをにせん
503 おもふにはしのふることそまけにける
色にはいてしとおもひしものを
504 わか恋を人しるらめやしきたえの
まくらのみこそしらはしるらめ
505* あさちうのおの、しのはらしのふとも」7
ひとしるらめやいふ人なしに
506 人しれぬおもひやなそとあしかきの
まちかけれとん(も)あふよしのなき
507 おもふともこふともあはんものなれや
ゆふてもたゆくとくるしたひも
508* いてわれを人なとかめそをほふねの
ゆたのたゆたにものおもふころを」
509 い勢のうみにつりするあまのうけなれや
こゝろひとつをさためかねつる
510* いせのうみのあまのつりなはうちはへて
くるしくのみやをもひわたらん
511* なみたかはなかみなかみをたつねけん
ものおもふときのわか身なりけり
512* たねしあらはいはにもまつはおひにけり」8
恋をしこひはあはさらめやも

513 あさな〳〵たつかはきりのそらにのみ
うきておもひのあるよなりけり
514* わすらるゝときしなければあしたつの
おもひみたれてねをのみそなく
515 からころもひもゆふくれになるときは
かへす〳〵そ人は恋しき」
516* よひ〳〵にまくらさためんかたしらす
いかにねしかはゆめにみえけん
517 恋しきにいのちをかふるものならは
しにはやすくそあるへかりける
518 人のみもならはし物をあはすして
いさこゝろみんこひやしぬると
519* しのふれはくるしき物を人しれす」9
おもふてふことたれにかたらん
520* こむよにもはやなりなんみ(ママ)のまへに
つれなき人をむかしとおもはん
521 つれもなきひとをこふとてやまひこの
こたへするまてなけきつる哉
522 ゆくみつにかすかくよりもはかなきは
をもはぬ人をおもふなりけり」
523* 人をゝもふこゝろはわれにあらねはや
みのまとふたにしられさる覧
524 おもひやるさかひはるかになりやする
まとふゆめちにあふ人のなき
525* ゆめのうちにあひみんことをたのめつゝ
くらせるよひはねむかたもなし
526* こひしねとするわさならしむはたまの」10
よるはすからにゆめにみゆるは
527 なみたかはまくらなかるゝうきねには
ゆめもさたかにみえすそありける
528* 恋すれはわか身はかけとなりにけり
さりとて人にそはぬものから
529* かゝりひにあらぬものからなそもかく
なみたのかはにうきてもゆらん」
530* かゝりひのかけとなる身のかなしきは
なかれてしたにもゆるなりけり
531* はやきせにみるめをいせは我袖の
なみたのかはにうゑましものを

532* おきへにもよらぬたまものなみのうゑに
　みたれてのみやこひわたりなん
533* あしかものさはくいりえのしらなみの」11
　しらすやひとをかくこひんとは
534 ひとしれぬおもひをつねにするかなる
　ふしのやまこそわか身なりけれ
535 とふとりのこゑもきこへぬおくやまの
　ふかきこゝろを人はしらなん
536 あふさかのゆふつけとりもわかことく
　人や恋しきねのみなくらん」
537 あふさかのせきになかるゝいはし水
　いはてこゝろにおもひこそすれ
538 うきくさのうへはしけれるふちなれや
　ふかきこゝろをしるひとのなき
539* うちわひてよはゝんこゑにやまひこの
　こたえぬそらはあらしとそをもふ
540* こゝろかへするものにもかかたら(ママ)は」12
　くるしきものとひとにしらせん
541* よそにしてこふれはくるしいれひもの
　をなしこゝろにいさむすひてん
542 はるたてはきゆるこほりのゝこりなく
　きみかこゝろはわれにとけなん
543* あけたてはせみのをりはへなきくらし
　よるはほたるのもへこそわたれ」
544 なつむしの身をいたつらになすことも
　ひとつおもひによりてなりけり
545 ゆふされはいとゝひかたきわかそてに
　あきの露さへをきそはりつゝ
546 いつとても恋しからすはあらねとん(も)
　あきのゆふへはあやしかりけり
547 あきのたのほにこそ人を恋さらめ」13
　なとかこゝろにわすれしもせむ
548* あきのたのほのうへてらすいなつまの
　ひかりのまにもわれやわする、
549* 人めもるわれかはあやなはなすゝき
　なとかほにてゝ恋をせさらん
550* あはゆきのたまれはかてにくたけつゝ
　わかものおもひのしけきころ哉」

551*をくやまのすかのねしのきふるゆきの
けぬかといはん恋のしけきに」14

古今和謌集巻第十二　恋謌二

たいしらす　をの、こまち

552をもひつ、ぬれはや人のみえつらん
ゆめとしりせはさめさらましを

553*うた、ねに恋しき人をみてしより
ゆめてうものはたのみそめてき

554*いとせめて恋しきときはむはたまの」
よるのころもをかへしてそきる

そせいほうし

555*あきかせの身にさむけれはつれもなき
人をそたのんくる、よことに

しもついつもてらに人のわさしけ
る日真せいかたうしにていへりける

ことはをたに(ママ)よみてをの、こまちか」15
もとにつかはせりける

あへのきよゆきのあそん

556*つ、めともそてにたまらぬしらたまは
人をみぬめのなみたなりけり

かへし　こまち

557おろかなるなみたそ、てにたまはなす
われはせきあえすたきつせなれは」

寛平御時きさいのみやのうたあは
せのうた　ふちはらのとしゆきの朝臣

558*こひわひてうちぬるなかにゆきかよふ
ゆめのた、ちはうつ、ならなん

559*すみのえのきしによるなみよるさへや
ゆめのかよひち人めよくらん

をの、よしき」16

560*わか恋はみやまかくれのくさなれや
しけさまされとしる人のなき

きのとものり

561よひのまもはかなくみゆる夏むしに
まとひまされる恋もする哉

562*ゆふされはほたるよりけにもれとん(も)
ひかりみねはや人のつれなき」

563 さゝの葉にをくしもよりもひとりぬる
わかころもてそさへまさりける

564* わかやとのきくのかきねにをくしもの
きえかりてそわひしかりける（ママ）

565 かはのせになひくたまものみかくれて
人にしられぬ恋もするかな

みふのたゝみね」17

566 かきくらしふるしらゆきのしたきへに
きえてものおもふころにもある哉

ふちはらのをき風

567* きみこふるなみたのとこにみちぬれは
みをつくしとそわれはなりぬる

568* しぬるいのちいきもやするとこゝろみん
たまのをはかりあはんてはなん」

569* わひぬれはしゐてわすれんとおもへとも
ゆめてふものそ人たのめなる

よみ人不知

570* わりなくもねてもさめても恋しきか
こゝろをいつちやらはわすれん

571* 恋しきにわひてたましゐまとひなは
むなしきからのなにやのこらん」18

きのつらゆき

572* きみこふるなみたしなくはからころも
むねのあたりは色はれなまし

たいしらす

573 よとゝもになかれてそゆくなみたかは
ふゆもこほらぬみなはなりけり

574 ゆめちにも露やをくらんよもすから」
かよへるそてのひちてかはかぬ

そせいほうし

575 はかなくてゆめにも人をみつるよは
あしたのとこそをきうかりける

ふちはらのたゝふさ

576 いつはりのなみたなりせはからころも
しのひにそてはしほらさらまし」19

おほえの千さと

577 ねになきてひちにしかも春さめに（ママ）
ぬれにしそてとゝはゝこたえん

としゆきのあそん

578* わかことくものやわひしきほと、きす
ときそとん(も)なくよた、なく覧
つらゆき」

579 さ月やまこすゑをたかみほと、きす
なくねそらなる恋もするかな
をふしかうちのみつね

580* あき、りのはる、時なきこ、ろには
たちゐるそらもおもほへなくに
きよはらのふかやふ

581 むしのことこゑにたて、はなかねとも」20
なみたのみこそしたになかるれ
これさたのみこの家のうたあはせ
のうた　よみ人不知

582* あきなれはやまとよんまてなくしかに
われをとらめやひとりぬる夜は
たいしらす　つらゆき

583 あきの野にみたれてさける花の色の」
ちくさにものをおもふころかな
みつね

584* ひとりしてものをおもへはあきのたの
いなはのそよといふ人もなし
ふかやふ

585 人を、もふこ、ろはかりにあらねとん(も)
雲井にのみもなきわたる哉」21
た、みね

586* 秋風にかきなすことのこゑにさへ
はかなく人の恋しかる覧
つらゆき

587* まこもかるよとのさは水あめふれは
つねよりもなをふかきわか恋
やまとに侍ける人につかはしける」

588 こえぬまはよしの、やまのさくら花
ひとつてにのみき、わたるかな
やよひはかりにもの、たうひける人
のもとにまた人まかりつ、せうそこ
すとき、てよみてつかはしける

589 つゆならぬこ、ろを花にをきそめて

かせふくことにものおもひそつく」22

たいしらす　さかのうへのこれのり

590わか恋にくらふのやまのさくら花
まなくちるともかすはまさらし

むねをかのおほより

591ふゆかはのうへはこほれるわれなれや
したになかれてこひわたる覧

たゝみね」

592*たきつせのねさしとまらぬうきくさの
うきたる恋もわれはするかな

とものり

593*よひ〳〵にぬきてわかぬるからころも
かけておもはぬときのまもなし

594*あつまちのさやの中やまなか〳〵に
なにしか人をおもひめ(ママ)けん」23

595しきたへのまくらのしたにうみはあれと
ひとをみるめはをひすそありける

596*としをへてきえぬおもひはありなから
よるのたもとはなをこほりつゝ

つらゆき

597わか恋はしらぬやまちにあらなくに
まとふこゝろそわひしかりける」

598*くれなゐのふりいてゝなくなみたには
たもとのみこそ色まさりけれ

599しらたまとみえしなみたもとしふれは
からくれなゐにうつろひにけり

みつね

600なつむしをなにかいひけんこゝろから
われもおもひにもへぬへらなり」24

たゝみね

601*かせふけはみねにわかるゝしらくもの
たえてつれなききみかこゝろか

602つきかけにわか身をかふるものならは
つれなき人もあはれとやみん

ふかやふ

603*こひしなはたかなはたゝしよの中の」
つねき(ママ)ものといひはなすとん(も)

つらゆき

604 摂津のなにはのあしのめもはるに
しけきわか恋人しるらめや
605* てもふれて月日へにけりしらまゆみ
をきふしよるはいこそねられね
606* ひとしれぬおもひのみこそわひしけれ」25
わかなけきをはわれのみそきく
とものり
607* ことにいて、いはぬはかりそみなせかは
したになかれて恋しきものを
みつね
608 きみをのみおもひねにねしゆめなれは
わかこゝろからみつるなりけり」
たゝみね
609 いのちにもまさりてをしくあるものは
みはてぬゆめのさむるなりけり
はるみちのつらき
610 あつさゆみひけはもとすゑわかゝたに
よるこそまされ恋のこゝろは
みつね」26

611 わか恋はゆくゑもしらすはてもなし
あふをかきりとおもふはかりそ
612* われのみそかなしかりけるひこほしの
あはてすくせるとしゝなけれは
ふかやふ
613 いまはゝやこひしなましをあひみんと
たのめしことそいのちなりける」
みつね
614 たのめつゝあらて(ママ)としふるいつはりに
こりぬこゝろを人はしらなん
とものり
615* いのちやはなにそはつゆのあたものを
あふにしかへはをしからなくに」27

古今和謌集巻第十三　恋哥三

やよひのつひたちにしのひに人にもの
いひてのちにあめのそほふりけるに
よみてつかはしける
ありはらのなりひらの朝臣

616*をきもせすねもせてよるをあかしては
はるのものとてなかめくらしつ」
なりひらの家なりける女のもとに
よみてつかはしける
ふちはらのとしゆきの朝臣
617*つれ〳〵のなかめにまさるなみたかは
そてのみぬれてあふよしもなし
かの女にかはりて返によめる
なりひらのあそん」28
618あさみこそ、てはひつらめなみたかは
みさへなかるときかはたのまん
たいしらす　よみ人不知
619よるへなみ、おこそとほくへたてつれ
こ、ろはきみかかけとなりにき
620いたつらにゆきてはきぬるものゆへに
みまくほしさにいさなはれつ、」
621*あはぬよのふる白ゆきとつもりなは
われさへともにきへぬへき哉
この哥はある人のいはくかきのもとの人丸か也

なりひらのあそん
622*あき、りにさ、わけしあさの袖よりも
あはてこし夜そひちまさりける
おの、こまち」29
623*みるめなきわか身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆく覧
みなもとのむねゆきのあそん
624あはすしてこよひあけなは春の日の
なかくや人をつらしとおもはん
みふのた、みね
625ありあけのつれなくみえしわかれより」
あかつきはかりうきものはなし
ありはらのもとかた
626あふことのなきさにしよるなみなれは
うらみてのみそたちかへりける
よみ人不知
627*かねてよりかせにさきたつなみなれや
あふことのなきまたきたつ覧」30
た、みね

628 みちのくにありといふなるなとりかは
なきなとりてはくるしかりけり
みはるのありすけ
629 あやなくてまたきなきなのたつたかは
わたらてやまんものならなくに
もとかた
630 ひとはいさわれはなきなのをしけれは」
むかしもいまもしらすとをいはん
よみ人不知
631* こりすまにまたきなきなはたちぬへし
人にくからぬよにしすまへは
ひんかしのこてうわたりに人をしり
をきてまかりかよひけりしのひな
るところなりけれはかとよりも」31
えいらてかきのくつれよりかよひ
けるをたひかさなりけれはあるし
き、つけてかのみちによことに人を
ふせてまもらせけれはいきけれと
えあはてのみかへりきてよみてやりける
なりひらのあそん
632* ひとしれぬわか、よひちのせきもりは」
よひ〳〵ことにうちもねな、ん
たい不知　つらゆき
633 しのふれと恋しき時はあしひきの
やまよりつきのいて、こそくれ
よみ人不知
634 こひ〳〵てまれにこよひそあふさかの
ゆふつけとりはなかすもあらなん」32
こまち
635* あきのよはなのみなりけりあふといへは
ことそともなくあけぬるものを
をふしかうちのみつね
636 なかしともおもひそはてぬむかしより
あふ人からの秋のよなれは
よみ人不知」
637* しの、めのほから〳〵とあけゆけは
おのかきぬ〳〵なにそわひしき
藤原のくにつねの朝臣

638あけぬとていまはのこゝろつくからに
なといひしらぬおもひそふ覧
寛平御時きさいのみやのうたあ
はせの哥　としゆきのあそん」33
639あけぬとてかへるみちにはこきたれて
あめもなみたもふりそほちつゝ
たいしらす　寵
640*しのゝめのわかれをゝしみわれそまつ
とりよりさきになきはしめつる
よみひとしらす
641ほとゝきすゆめかうつゝかあさつゆの」
をきてわかれしあかつきのこゑ
642たまくしけあけはきみかなたちぬへみ
よふかくこしを人みけんかも
おほえの千さと
643けさはしもおきけんかたもしらさりつ
おもひいつるそきへてかなしき
人にあひてのあしたによみてつか」34
はしける　なりひらのあそん
644ねぬる夜のゆめをはかなみまとろめは
いやはかなにもなりまさる哉
なりひらの朝臣の伊勢のくにゝかり
のつかひにまかりける時斎宮なり
ける人にいとみそかにあひてまたの
あしたにまた人やるすへなくておもひ」
をりけあひたに女のもとよりおこ
せたりける　よみ人不知
645*きみやこしわれやゆきけんおもほへす
ゆめかうつゝかねてかさめてか
かへし　なりひらのあそん
646*かきくらすこゝろのやみにまよひにき
ゆめうつゝとはこよひさためよ」35
たいしらす　よみ人しらす
647むはたまのやみのうつゝはさたかなる
ゆめにいくらもまさらさりけり
648さよふけてあまのとわたる月かけに
あかすもきみをあひみつる哉
649*きみかなもわかなもたゝしなにはなる

みつともいふなあひきとん(も)いはし」
650* なとりかはせゝのむもれきあらはれて
いかにせんとかあひみそめけん
651 よしのかはみつのこゝろははやくとん(も)
たきのをとにはたてしとそおもふ
652* 恋しくはしたにやおもへむらさきの
ねすりの衣色にいつなゆめ
おのゝはるかせ」36
653* はなすゝきほにてゝこひはなをゝしみ
したゆふそてのむすほゝれつゝ
たちはなのきよきかしのひにあひしれ
りけるをんなのもとよりおこせた
りける　よみ人不知
654 おもふとちひとり〳〵か恋しなは
たれによそへてふちころもきん」
かへし　たちはなのきよき
655 なきこふるなみたにそてのそほちなは
ぬきかへかてらよるこそはきめ
たいしらす　こまち

656* うつゝにはさこそはあらめゆめにさへ
ひとめをもるとみるかすへなさ
657* かきりなきおもひのまにまよるもこん」37
ゆめちをさへは人もとかめし
658 ゆめちにはあしもやすめすかよへとん(も)
うつゝにひとめみしことはあらす
よみ人不知
659 おもへともひとめつゝみのたかけれは
かはとみなからえこそわたらね
660 たきつせのはやきこゝろをなにしかも」
ひとめつゝみのせきとゝむらん
寛平御時きさいの宮のうたあはせの
うた　きのとものり
661 くれなゐの色にはいてしかくれぬの
したにかよひてこひはしぬとん(も)
たいしらす　みつね
662 ふゆのいけにすむにほとりのつれもなく」38
そこにかよふと人にしらすな
663 さゝの葉にをくはつしものよをさむみ

しみはつくとも色にいてめや

よみ人しらす

664* やましなのをとはのやまのをとにたに
人のしるへくわか(ママ)わかこひめかも

この哥ある人あふみのうねめのとなんまうす」

きよはらのふかやふ

665 みつしほのなかれひるまをあひかたみ
みるめのうらによるをこそまて

たいらのさたふん

666 しらかはのしらすとん(も)いはしそこきよみ
なかれてよゝにすまむとおもへは

とものり」39

667 したにのみこふれはくるしたまのをの
たえてみたれん人なとかめそ

668* わか恋をしのひかねてはあしひきの
やまたちはなの色にいてぬへく

よみ人不知

669* おほかたはわかなんみなとこきてなん
よをうみへたにみるめすらなし」

さたふん

670* まくらよりまたしる人もなきものを
なみたせきあえすもらしつる哉

よみ人しらす

671 かせふけはなみうつきしのまつなれや
ねにあらはれてなきぬへらなり

この哥はある人のいはくかきのもとの」40

人丸かなり

672 いけにすむなを、しとりのみつをあさみ
かくるとすれとあらはれにけり

673 あふことはたまのをはかりなのたつは
よしの、かはのたきつせのこと

674 むらとりのたちにしわかないまさらに
ことなしふともしるしあらめや」

675 きみによりわかなははなに春かすみ
野にもやまにもたちみちにけり

伊勢

676* しるといへはまくらたにせてねし物を
ちりならなのそらにたつ覧」41

古今和歌集巻第十四　恋哥四

たいしらす　よみ人しらす

677* みちのくのあさかのぬまのはなかつみ
かつみる人にこひやわたらん

678* あひみすは恋しきこともなからまし
おとにそ人をきくへかりける

つらゆき」

679 いそのかみふるのなかみちなか〳〵に
みすは恋しとおもはましやは

ふちはらのたゝゆき

680* きみてへは見まれみすまれふしのねの
めつらしけなくもゆるわか身を

伊勢

681 ゆめにたにみゆとはみえしあさな〳〵」42
わかおもかけにはつるみなれは

よみ人不知

682 いしまゆく水のしらなみたちかへり
かくこそはみめあかすもある哉

683 い勢のあまのあさなゆふなにかつくてふ
みるめに人をあくよしもかな

とものり」

684 はるかすみたなひくやまのさくら花
みれとん(も)あかぬきみにもあるかな

ふかやふ

685 こゝろをそわりなきものとおもひぬる
みるものからや恋しかるへき

おふしかうちのみつね

686 かれはてんのちをはしらてなつくさの」43
ふかくも人のおもほゆるかな

よみ人不知

687* あすかゝはふちはせになるよなりとん(も)
おもひそめてし人はわすれし

寛平御時きさいの宮のうたあはせ
のうた

688 おもふてうことの葉のみやあきをへて
色もかはらぬものにはある覧」

たいしらす

689* さむしろにころもかたしきこよひもや
われをまつらんうちのはしひめ
690* きみやこんわれやゆかんのいさよひに
まきのいたともさゝすねにけり
そせいほうし
691* いまこむといひしはかりになかつきの」44
ありあけのつきおまちてつるかな
よみ人しらす
692* つきよゝしよゝしと人につけやらん
こてふにゝたりまたすしもあらす
693 きみこすはねやへもいらしこむらさき
わかもとゆひにしもはをくとん(も)
694* みやきのゝもとあらのこはき露をもみ」
かせおまつことときみをこそまて
695* あな恋しいまもみてしかやまかつの
かきねにさけるやまとなてしこ
696 摂津のなにはおもはすやましろの
とはにあひみんことをのみこそ
つらゆき

697 しきしまのやまとにあらぬから衣」45
ころもへすしてあふよしもかな
ふかやふ
698 恋しとはたかなつけゝむことならん
しぬとそたゝにいふへかりける
よみ人しらす
699* みよしのゝおほかはのへのふちなみの
なみにをもはゝわれこひめやは」
700* かくこひんものとはわれもおもひにき
こゝろのうらそまさしかりける
701 あまのはらふみとゝろかしなるかみも
おもふなかをはさくるものかは
702* あつさゆみひきのゝつゝらすゑつひに
わかおもふ人にことのしけゝん
このうたある人あめのみかとのあふみの」46
うねへにたまひけるとなんまうす
703* なつひきのてひきのいとをくりかへし
ことしけくともたんとおもふな
このうたはかへしにたてまつりける

704 さと人のことはなつの、しけくとん(も)
かれゆくきみにあはさらめやは

ふちはらのとしゆきのあそんのなり」
ひらのあそんの家なりけるをん
なをあひしりてふみつかはしける
ことはにいま、うてくあめのふり
けるをなんみわつらひ侍といへり
けるをき、てかのをんなにかはりて
よめりける　ありはらのなりひらの朝臣

705* かす〳〵におもひをもはすとひかたみ」47
みをしるあめはふりそまされる

女なりひらのあそんをところさた
めすありきすとおもひてよみて
つかはせりける　よみ人不知

706* おほぬさのひくてあまたにとまらねは
おもへとえこそたのまさりけれ

かへし　なりひらのあそん」

707* おほぬさとなにこそたてれなかれても
つひによるせはありてうものを

題不知　よみひとしらす

708* すまのうらにしほやくけふり風おいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり

709* たまかつらはふきあまたにみえぬれは
たえぬことのうれしけもなし」48

710* たかさとによかれをしてかほと、きす
た、こ、にのみねたるこゑする

711* いてひとはことのみそよきつきくさの
うつしこ、ろは色ことにして

712 いつはりのなきよなりせはいかはかり
人のことのはうれしからまし

713 いつはりとおもふものからいまさらに」
たかまことをかわれはたのまん

そせい

714* あきかせにやまのこの葉のうつろへは
人のこ、ろもいか、とそおもふ

寛平御時きさいの宮のうたあは
せの哥　とものり

715 せみのこゑきけはかなしな夏ころも」49

うすくや人のならんとおもへは
たいしらす　よみ人不知
716うつせみのよの人ことのしけゝれは
わすれぬものゝかれぬへらなり
717*あかてこそおもはんなかはわすれなめ
そをたにのちのわすれかたみに
718わすれなんとおもふこゝろのつくからに」
ありしよりけにまつそ恋しき
719*わすれなんわれをうらんなほとゝきす
人のあきにはあはんともせす
720たえすゆくあすかのかはのよとみなは
こゝろあるとやひとのおもはん
この哥ある人のいはくなかとみの
あつま人か哥なり」50
721よとかはのよとむと人はみるらめと
なかれてふかきこゝろあるものを
そせい
722*そこふかきふちやはさはくやまかはの
あさきせにこそうはなみはたて
よみ人不知
723くれなゐのはつはなそめの色ふかく」
おもひしこゝろわれわすれめや
かはらのひたりのおほいまうちきみ
724みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれんとおもふわれならなくに
よみ人不知
725おもふよりいかにせよとかあきかせに
なひくあさちの色ことになる」51
726ちゝの色にうつろふらめとしらなくに
こゝろしあきのもみちならねは
おのゝこまち
727あまのすむさとのしるへにあらなくに
うらみんとのみ人のいふらん
しもつけのおむね
728*くもりひのかけとしなれるわれなれは」
めにこそみへねみをははなれは
つらゆき
729いろもなきこゝろを人にそめしより

うつろはんとはおもほへなくに

よみ人しらす

730 めつらしき人をみんとやしかもせぬ
わかしたひものとけわたるらん」52

731* かけろふのそれかあらぬかはるのひの
ふるひとみれはそてそひちぬる

732* ほりへこくたな、しをふねこきかへり
をなし人にや恋わたるらん

伊勢

733* わたつみのあれにしとこをいまさらに
はらは、そてやあはにうきなん」

つらゆき

734* むかへになをたちかへるこ、ろかな
恋しきことにものわすれせて

人をしのひにあひしりてあひかたく
ありけれはその家のあたりをま
かりありきけるをりにかりのな
くをき、てよみてつかはしける」53

おほとものくろぬし

735* おもひいて、恋しきときははつかりの
なきてわたると人はしらすや

みきのおほいまうちきみすます
なりにけれはかのむかしをこせた
りけるふみともをとりあつめてかへ
すとてよみてをくりける」

ないしのすけふちはらのよるかの朝臣

736* たのめこしことの葉いまはかへしてん
わか身ふるれはをきところなし

返し　こむ院のおほいまうちきみ

737* いまはとてかへすことの葉ひろひをきて
おのかものからかたみとやみん

題不知　よるかの朝臣」54

738 たまほこのみちはつねにもまとはなん
人をとふともわれかとおもはん

よみひとしらす

739* まてとは、ねてもゆかなんしゐてゆく
こまのあしをれまへのたなはし

中納言みなもとの、ほるのあそん

のあふみのすけに侍けるときに」
よみてやれりける
閑院
740* あふさかのゆふつけとりにあらはこそ
きみかゆきゝをなく〳〵もみめ
たいしらす　伊せ
741 ふるさとにあらぬものからわかために
人のこゝろのあれてみゆらん」55
龍
742* やまかつのかきほにはへるあをつゝら
ひとはくれとんこ(も)とつてのなき
さかゐのひとさね
743* おほそらは恋しき人のかたみかは
ものおもふことになかめちるらん
よみ人しらす」
744* あふまてのかたみもわれはなにかせん
みてもこゝろのなくさまなくに
おやのまもりける人のむすめに
いとしのひにあひてものいひけるあひ
たにおやのよふといひけれはいそきて
かへるとてもをなんぬきおきていり
にけるその、ちもおかへすとてよめる」56
おきかせ
745 あふまてのかたみとてこそとゝめけめ
なみたにうかふもくつなりけり
たいしらす　よみ人不知
746* かたみこそいまはあたなれこれなくは
わする、時もあらまし物を」
（白紙）　」57
古今和謌集第十五(ママ)　恋哥五
こてうのきさいのみやのにしのたいに
すみける人にほにはあらてものいひ
わたりけるをむ月のとうかあまり
はかりになんほかへかくれにけるにあ
りところはき、けれとえものもいはて
またのとしの春梅花さかりに月のおも
しろかりける夜そこ(ママ)を、もひいて、」

かのにしのたいにいきて月のかたふく
まてあはらなるいたしきにふせりて
よめりける　ありはらのなりひらのあそん
747* 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつはもとのみにして
題不知　藤原のなかひらのあそん
748 はなすゝきわれこそしたにおもひしか
ほにて、人にむすはれにけり」58
藤原のかけすけの朝臣
749* よそにのみきかましものを、とはかは
わたるとなしにみなれそめけん
おふしかうちのみつね
750 わかことくわれを、もはん人も哉
さてもやうきとよをこ、ろみん
もとかた」
751 ひさかたのあまつそらにもすまなくに
人はよそにそおもふへらなる
よみ人しらす
752 みてもまた〳〵もみまくのほしけれは
なる、を人はいとふへらなり
きのとものり
753* くまもなくなきたるあまのわれなれや」59
いとはれてのみよをはへぬ覧
よみひとしらす
754* はなかたみめならふ色のあまたあれは
わすられにけんかすならぬ身は
755* うきめのみおひてみたる、うらなれは
かりにのみこそあまはよるらめ
伊せ」
756* あひにあひてものおもふころのわかそてに
やとるつきさへぬる、かほなる
よみひとしらす
757 あきならてをくしらつゆはねさめする
わかたまくらのしつくなりけり
758 すまのあまのしほやき衣をさをあらみ
まとをにあれやきみかきまさぬ」60
759 やましろのよとのわかこもかりにたに
こぬ人たのむわれそはかなき

760* あひみねは恋こそまされみなせかは
なに、ふかめておもひそめけん

761* あか月のしきのはねかきも、はかき
われそかすかくきみかこぬ夜は

762 たまかつらいまはたゆとやふくかせの」
おとにも人のきこへさるらん

763 わかそてにまたきしくれのふりぬるは
きみかこゝろにあきやきぬらん

764* やまの井のあさきこゝろはおもはぬを
かけはかりのみ人のみゆらん

765 わすれくさたねとらましをあふことの
いとかくかたきものとしりせは」61

766 こふれとん(も)あふよのなきはわすれくさ
ゆめちにさへやおひしけるらん

767 ゆめにたにあふことかたくなりゆくは
われやいをぬる人やわする、
けむけいほうし

768 もろこしもゆめに見しかはちか、りき
おもはぬなかそはるけかりける」

さたの、ほる

769* ひとりのみなかむるやとのつまなれは
人をしのふのくさそおひける
僧正へせう

770 わかやとはみちもなきまてあれにけり
つれなき人をまつとせしまに

771 いまこむといひてわかれしあしたより」62
おもひくらしのねをのみそなく
よみひとしらす

772 こめやとはおもふものからひくらしの
なくゆふくれはたちまたれつ、

773* いましはとわひしきものをさ、かにの
ころもにか、りわれをたのむる

774* いまはこしとおもふ物からわすれつ、」
またる、事のまたもやまぬか

775 つきよにはこぬ人またるかきくもり
あめもふらなんわひつ、もねん

776 うへていにしあきたかるまてみえこねは
けさはつかりのねにそなきぬる

777 こぬひとをまつゆふくれのあきかせは
いかにふけはかわひしかるらん」63

778* ひさしくもなりにけるかなすみのへの
まつはくるしきものにそありける

かねみのおほきみ

779 すみのえのまつほとひさになりぬれは
あしたつのねになかぬひはなし

なりひらのあそんのあひしりて侍
けるをかれかたになりにけれは」
ち、かやまとのかみに侍けるもとへ
まかるとてよみてつかはしける

伊勢

780* みわのやまいかにまちみんとしふとも
たつぬる人もあらしとおもへは

たいしらす　雲林ゐんのみこ

781* ふきまよふのかせをさむ秋はきの」64
うつりもゆくか人のこゝろの

おの、こまち

782 いまはとてわか身しくれにふりぬれは
ことのはさへにうつろひにけり

おの、さたき

783* 人をおもふこゝろこの葉にあらはこそ
かせのまに〳〵ちりもみたれめ」

なりひらの朝臣のきのありつねか
むすめにすみけるをうらむること
ありてしはしのあいたひるはきてゆ
ふさりはかへりのみしけれはよみて
おくりける

784* あまくものよそにも人のなりゆくか
さすかにめにはみゆるものから」65

かへし　なりひらのあそん

785 ゆきかへりそらにのみしてふることは
わかゐるやまのかせはやみなり

たいしらす　かけのりのおほきみ

786 からころもなれは身にこそまつはれめ
かけてのみやはこひんとおもひし

とものり」

787 あき風は身をわけてしもふかなくに

人のこゝろのそらになる覧

みなもとのむねゆきの朝臣

788* つれもなくなりゆく人のことくさそ
あきよりさきのもみちなりける

こゝちそこなへりけるころあひし
りて侍ける人のとはてこゝちおこ
たりてのちとふらへりけれは
よみてつかはしける」66

兵衛たち花のたかつねの朝臣むすめ

789* してのやまふもとよりのみかへりきぬ
つらき人よりまつこえしとて

あひしれりける人のやうやくかれ
かたになりけるあひたにやけたるち
の葉に文をさしてつかはせりける

こまちかあね」

790 ときすきてかれゆくおの、あさちには
いまはおもひそたえすもえける

ものおもひけるころものへまかりけ
れはのちに野火のもえけるをみてよめる

いせ

791* ふゆかれの、へとわか身を、もひせは
もえてん(も)はるをまたましものを」67

たいしらす　とものり

792 水のあわのきえてうきみといひなから
なかれてなをもたのまる、かな

よみ人しらす

793* みなせかはありてゆくみつなくはこそ
つひにわか身をたえぬとおもはめ

みつね」

794 よしのかはよしや人こそつらからめ
はやくいひてしことはわすれし

よみひとしらす

795* よの中の人のこゝろははなそめの
うつろひやすきものにそありける

796* こゝろこそうたてにくけれそめさらは
うつろふこともおしからましや」68

こまち

797* いろみえてうつろふ物はよの中の

人のこゝろのはなにそありける
よみ人しらす
800* いまはとてきみかくれなはわかやとの
花をはひとり見てやしのはん
むねゆきのあそん」
801 わすれくさかれもやするとつれもなき
人のこゝろにしもはおかなん
よみ人不知
798* 我のみやよをうの花となきわひん
人のこゝろのはなとちりなは
そせいほうし
799 おもふともかれなん人をいかゝせん」69
あかすちりぬる花とこそみめ
寛平御時御屏風に哥かゝせ給ける
ときよみける
そせい
802* わすれくさなにをかたねとおもひしは
つれなき人のこゝろなりけり
題不知
けんけいほうし

803* あきのたのいねてふこともかけなくに」
なにをうしとて人のかる覧
つらゆき
804* はつかりのなきこそわたれよの中の
人のこゝろのあきしうけれは
よみ人不知
805 あはれともうしとも物をおもふとき
なとかなみたのいとなかるらむ」70
806 みおうしとおもふにきえぬものなれは
かくてもへぬるよにこそありけれ
ないしのすけ藤原のなをいこの朝臣
807* あまのかるもにすむゝしのわれからと
ねをこそなかめ人はうらみし
いなはもとよしのおほきみのむすめ
808* あひみぬもうきもわか身のからころも」
おもひしらすもとくるひもしかな(ママ)
寛平御時きさいの宮の哥合うた
すかのたゝおん
809* つれなきをいまはこひしとおもへとも

こゝろよはくもをつるなみたか
たいしらす　いせ
810 人しれすたえなましかはわひつゝも」71
なきなそとたにいはまし物を
よみ人不知
811 それをたにおもふことゝてわかやとを
見きとないひそ人のきかくに
812* あふことのいとん(も)たえぬるときにこそ
人の恋しきことん(も)しりぬれ
813 わひはつるときさへものゝかなしきは」
いつこをしのふなみたなるらん
ふちはらのおき風
814* うらみてもなきてもいはん人そなき
かゝみにみゆるかけならすして
よみ人不知
815 ゆふされは人なきとこをうちはらひ
なけかんためとなれる我身か」72
816 わたつみのわかみこすなみたちかへり
あまのすむてふうらみつるかな
817 あらをたをあらすきかへしかへしても
人のこゝろをみてこそやまめ
818* ありそうみのはまのまさこをたのめしは
わするゝことのかすにそありける
819* あしへより雲井をさしてゆくかりの」
いやとをさかるわか身かなしも
820 しくれつゝもみつるよりもことのはの
こゝろのあきにあふそわひしき
821* 秋風のふきとふきぬるむさしのは
なへて草はのいろかはりけり
こまち
822 あき風にあふたのみこそかなしけれ
わか身むなしくなりぬとおもへは」73
たひらのさたふん
823 あき風のふきうらかへすくすのはの
うらみてもなをうらめしき哉
よみひとし(ママ)す
824* 秋といへはよそにそきゝしあた人の
われをふるせるなにこそありけれ

825* わすらるゝ身をうちはしのなかたえて
人もかよはぬとしそへにける
さかのうへのこれのり」

826* あふことをなからのはしのなからへて
こひわたるまにとしそへにける
とものり

827 うきなからけぬるあはとん(も)なりなゝん
なかれてとたにたのまれぬ身は
よみ人不知

828* なかれてはいもせのやまの中におつる
よしのゝかはのよしやよのなか」74

○

しまつ山ふり

1073* しつは山うちいてゝみれはかさしゆく
のしまこきかくるたなゝしおふね
かみあそひのうた

1074* 神かきのみむろのやまのさかきはゝ
かみのみむろにしけりあひにけり
とりものゝうた

1075 しもやたひをけとかれせぬさかきはの」
たちさかゆへきかみのきねかも

1076* まきもくのあなしの山のやまひとゝ
人もみるかね山かつらせよ

1077 みやまにはあられふるらしとやまなる
まさきのかつらいろつきにけり

1078 みちのくのあたちのまゆみわかひかは
すゑさへよりこしのひ〳〵に

1079 わかゝとのいた井のしみつさとゝをみ」

補注

471 「はやく」の「はや」見せ消ち、右傍「たかイ」。

473 「人をまつかな」の「人をまつ」見せ消ち、右傍「としをふるイ」。

476 「さこん」見せ消ち、右傍「右近イ」。

同 「こひしきは」の「き」見せ消ち、右傍「くイ」。

478 「まつりの」の「の」見せ消ち、右傍「に」。

同 「をひてくる」の「ひ」の下に小丸印、「い」補入。

479 「よみて」の上に小丸印、「後に」補入。

481 「ものおもふかな」の「の」の下に小丸印、「を」補入。

482 「あふことのくものはるかに」の二つの「の」見せ消ち、それぞれ右傍に「は」「ゐ」。

484 「ゆふくれの」の「の」見せ消ち。右傍「は」。

同 「こふるみは」見せ消ち、右傍「をこふとてイ」。

487 「そなき」見せ消ち、右傍「はなしイ」。

489 「そなき」見せ消ち、右傍「はなしイ」。

493 「なそ」の「そ」の右傍「と」、傍書見せ消ち。

498 「ほつえ」の「ほ」の右傍「はイ」、「つ」の左に朱二点注記。

500 「したもえにせん」の「に」見せ消ち、右傍「を」。

505 「あさちう」の「う」見せ消ち、右傍「ふ」。

508 「ころを」の「を」見せ消ち、右傍「そイ」。

同 「ゆたのたゆた」の二字目と六字目の「た」の左に朱二点注記。「そイ」の「そ」の左に朱二点注記。

510 「くるしくのみや」の下の「く」見せ消ち、右傍「と」。

511 「なか」の「か」見せ消ち、右傍「に」。

512 「あらは」の「ら」見せ消ち、右傍「れイ」。

同 「にけり」の「に」に合点、「にけり」の下に「用之歟」と小字書入れ、「にけり」の右傍に「ぬへし」、傍書見せ消ち。

同 「こひは」の「は」の左に朱二点注記。

514 「あしたつ」の「つ」の左に朱二点注記。

516 「よひ〳〵に」の右傍に「ゆふくれは」、傍書の右に付点（見せ消ち）し、「不用之歟」と小字書入れ。

同 「しらす」見せ消ち、右傍に「もなしイ用」。

同 「ねしかは」の「かは」見せ消ち、右傍「夜かイ（「夜イ」の上より重書）」。

519 「しのふれは」の「は」見せ消ち、右傍「と」。

520 「なりなんみのまへに」の「み」見せ消ち、「な」と「ん」の間の右傍「な」、「み」の右傍「め」。

523 「人を、もふ」の「を」に合点、「を、もふ」の右傍「こふる」、傍書の右傍に付点（見せ消ち）。

525 「たのめつゝ」の「め」見せ消ち、右傍「み」、「み」に合点。

526 「みゆるは」の「ゆるは」見せ消ち、左傍「えつゝ」、「えつゝ」に合点。

528 「ものから」の「から」見せ消ち、右傍に「ゆふ」、また「ゆへ」。「ゆふ」見せ消ち。

529 「ものから」見せ消ち、右傍「わか身の」。

同 「なそもかく」の「そ」の左に朱二点注記。

530 「かなしきは」の「かな」見せ消ち、右傍「わひイ」。

531 「なみたのかはに」の「か」字、最初「う」に誤り、重書訂正、更に右傍に「か」。

532 「おきへ」の「へ」の左に朱二点注記。

533 「かくこひんとは」に合点、右傍「こひんものとは」、傍書の右に付点（見せ消ち）。

539 「そら」見せ消ち、右傍「山」。

540 「かたらは」の「ら」見せ消ち、右傍「恋」。

541 「をなし」の「し」の左に朱二点注記。

543 「あけたては」の「は」の左に朱二点注記。

548 「ほのうへてらす」の「へ」と「て」の間、右傍「を」。

549 「恋をせさらん」の「をせさ」見せ消ち、右傍「すしもあイ」。

550 「かてに」の「に」右傍に「と」、「に」「と」ともに合点。

同 「か」「て」ともに左に朱二点注記。傍書「と」に朱二点注記か（但し、汚れとも見ゆ）。

同 「しけき」の左傍「ふかき」、傍書見せ消ち。

551 「すかのね」の「ね」の右傍「は」、傍書見せ消ち。

同 「しのき」の「き」、最初誤って「ふ」とし、「き」重書、念のため右傍に「キ」と書く（同筆）。「キ」に合点。

同 「けぬかと」の「かと」見せ消ち、右傍「とかイ」。

553 「そめてき」の「き」の左に朱二点注記。

554 「かへしてそきる」の「き」の右傍「ぬ」、傍書見せ消ち。

555 「たのん」の「ん」の右傍「む」。

556 「真せいか」の「せいか」見せ消ち、右傍「法師の」。

同 「ことはをたに」の「を」の下に小丸印、「う」補入。

558 「たゝち」の左に朱で、それぞれ、一点、二点、一点注記。

559 「すみのえ」の「の」に合点、右傍「よし」、傍書右傍に付点（見せ消ち）。

560 「しる人のなき」の「の」に合点、右傍「モ」、傍書右傍に付点（見せ消ち）。

562 「ゆふされは」の「れ」に合点、右傍「り」、傍書見せ消ち。

同 「もれとん」の「も」と「れ」の間、右傍「ゆ」。同筆か。

564 「わひしかりける」の「わ」見せ消ち、右傍「こ」、「こ」に合点。

567 「なりぬる」の「ぬ」見せ消ち、右傍「け」、「け」に合点。

568 「こゝろみん」の「ん」見せ消ち、右傍「に」。

同 「あはんてはなん」の「ては」見せ消ち、右傍「といは」、傍書に合点。

569 「ゆめてふものそ」の「てふ」見せ消ち、右傍「といふイ」。

570 「恋しきか」の「か」の左に朱二点注記。

571 「のこらん」の「ら」に合点、右傍「さ」、傍書見せ消ち。

572 「色はれなまし」の「はれ」見せ消ち、右傍「もえな」、傍書に合点。

578 「わひしき」の「わひ」見せ消ち、右傍「かな」、傍書に合点。

580 「たちゐる」の「る」見せ消ち、右傍「のイ」。

582 「とよんまて」の「ん」の右傍「む」。

584 「あきのたの」の「た」見せ消ち、右傍「よ」。

同 「いなはの」の「の」に合点、左傍「も」、傍書見せ消ち。

同 「いふ人もなし」の「も」見せ消ち、左傍「の」、「の」に合点、「し」の上より「き」重書。

586 「はかなく」に合点、右傍「あや」、傍書見せ消ち。

587 「つねよりもなをふかき」の「もなをふかき」見せ消ち、左傍「ことにまさる」、傍書に合点。

592 「たきつせの」の「の」見せ消ち、右傍「にイ」。

同 「ねさしとまらぬ」の「まら」見せ消ち、右傍「とめ」。

593 「からころも」の「ら」見せ消ち、右傍「り」。

594 「なにしか」の「か」に合点、右傍「に」、傍書見せ消ち。

同 「おもひめけん」の「ひ」と「め」の間、右傍「そ」。

596 「こほりつゝ」の「つゝ」見せ消ち、右傍「けりイ」。

598 「ふりいてゝなく」の「て」の下に小丸印、「つ」補入、「く」に合点、右傍「き」、傍書見せ消ち。

601 「しらくもの」の「しらくも」見せ消ち、右傍「横雲」。

603 「つねきものと」の「ね」の下に小丸印、「な」補入。

605 「月日へにけり」の「り」見せ消ち、右傍「る」、「る」に合点。

同 「いこそねられね」に合点、左傍「ものをこそおもへ」、傍書を見せ消ちの後、すり消し。

606 作者「貫之」、別筆小字補記。

同 「われのみそきく」の「きく」見せ消ち、右傍「シル」、傍書に合点。

607 「したになかれて」の「なかれて」見せ消ち、左傍「かよひて」、傍書に合点。

612 「ひこほしの」の「の」見せ消ち、右傍「も」、「も」に合点。

615 「をしからなくに」の「なくに」に合点、「な」の左傍「ぬ」、「に」の左傍（「く」の左傍が正しい）「み」、「ぬ」と「み」ともに見せ消ち。

616 「つひたちに」の「ち」の下に小丸印、「より」補入、「に」見せ消ち。

同 「もの」の下に小丸印、「の」補入。

617 「なりひらの家なりける」の「の」の下に小丸印、「朝臣の」補入、「家」と「な」の間、右傍「に」、下の「な」見せ消ち、右傍「侍」。

同 「ふちはらの」見せ消ち。

621 「きへぬへき哉」の「きへ」「哉」見せ消ち、それぞれ右傍に「けぬ」「物を」、傍書ともに合点。

同 「人丸か也」の「か」の下に小丸印、「哥」補入。

622 「あきゝりに」の「ゝりに」見せ消ち、右傍「のゝに」、傍書に合点。

同 「あはてこし」の右傍「こし（ママ）」、傍書に合点、左傍「ぬる」、傍書見せ消ち。

623 「あしたゆく覧」の「覧」見せ消ち、右傍「クル」、傍書に合点。

627 「あふことのなき」の「の」見せ消ち、「き」の下に小丸印、「に」補入。

631 「またき」の「き」見せ消ち、右傍「も」。

632 「かとよりも」の「り」の下に小丸印、「し」補入。
同 「かへりきて」の「き」見せ消ち。
635 「こまち」の上に「をの丶」と別筆補記。
同 「あきのよは」の「は」見せ消ち、右傍「も」、傍書に合点。
637 「ほから〳〵と」の「か」の左に朱二点注記。
同 「なにそわひしき」の「に」「わひ」見せ消ち、それぞれ右傍に「る」「かな」、傍書ともに合点。
640 「寵」の下に二行割で「一説ウツク　或本カク／一説チヨウ用之」（同筆）とある。
645 「かりのつかひに」見せ消ち。
同 「まかり」の「り」の下に小丸印、「たり」補入。
同 「またのあしたにまた」の後の「また」見せ消ち。
同 「おもひをりけ」の「け」の下に小丸印、「る」補入。
646 「まよひにき」の「よ」見せ消ち、右傍「と」。
同 「こよひ」見せ消ち、右傍「よひと」、傍書に合点。
649 「わかなもたゝし」の「丶」見せ消ち、右傍「て」。
650 「あらはれて」の「て」見せ消ち、右傍「は」。
652 「したにや」の「や」見せ消ち、右傍「を」。
653 「したゆふそて」の「そて」見せ消ち、右傍「ひも」、傍書に合点。
656 「こまち」の右傍に「をの丶」を別筆補記。
同 「さこそはあらめ」の「さ」と「こ」の間、右傍「も」、「は」見せ消ち。
同 「みるかすへなさ」の「すへな」見せ消ち、右傍「わひし」また「わひしさ」、ともに合点を付す。「みるか」の「か」の下に小丸印。
657 「おもひのまにま」の「ま」と「に」の間、右傍「ま」、下の「ま」見せ消ち。
同 「ゆめちをさへは人もとかめし」の「は」「も」見せ消ち、それぞれ右傍「に」「は」。ただし、右傍「に」文字、虫損のため推定。
664 「わかわかこひめかも」の上の「わか」見せ消ち。
668 「いてぬへく」の「く」の右傍「シ」。
669 「わかなんみなとこきてなん」の上の「ん」見せ消ち、右傍「も」、「き」と「て」の間、右傍「い」。
同 「みるめすらなし」の「ら」見せ消ち、右傍「ク」。
670 「さたふん」の上に小丸印、右傍に「平」別筆補記。

同　「なきものを」の「もの」見せ消ち、右傍「こひイ」。
676　「ちりならなの」の「ら」の下に小丸印、「ぬ」補入。
677　「はなかつみ」の「か」の左に朱二点注記。
678　「おとにそ」の「お」の右傍「を」。
680　「きみてへは」の「て」見せ消ち、右傍「とい」。
同　「わか身を」の「身を」見せ消ち、右傍「恋」。
687　「そめてし」の「し」見せ消ち、右傍「む」。
689　「はしひめ」の右傍「又はたま本（「イ」に重書）」。
690　「いさよひに」に合点、右傍「やすら」、傍書の右に付点（見せ消ち）。
691　「まちてつるかな」の「ち」の下に小丸印、「い」補入。
692　「つけやらん」の「ん」見せ消ち、右傍「は」、「は」に合点。
694　「露をもみ」の「露」の下に小丸印。「を」補入。
695　「みてしか」の「か」の左に朱一点注記、「やまかつの」の「か」の左に朱二点注記。
同　「かきね」の「ね」見せ消ち、右傍「ほ」。
699　「われ」の「れ」見せ消ち、右傍「かイ」。
700　「うら」の「ら」、最初「ち」に誤り「ら」重書（同筆）、右傍に「占」と注記。
702　「つひに」の「ひ」の右傍「ゐ」、「ひ」「ゐ」ともに見せ消ち。
703　「たん」の「た」と「ん」の間、左傍「え」、右傍すり消し跡と墨書の抹消。
同　「かへしに」の「に」の右傍「よみて」。
同　「たてまつりける」の下に「となん」別筆補記。
705　「家なりける」の「なり」見せ消ち、右傍「にあり」。
同　「いまゝうてく」の「く」の右傍「く」（別筆）。本行の「く」が「ゝ」に見えるための補記。
706　「女」の上に小丸印、「ある」補入。
同　「とまらねは」の「とまらね」見せ消ち、右傍「なりぬれ」。
707　「つひに」の「ひ」見せ消ち、右傍「ゐ」。
同　「ありてうものを」の「う」見せ消ち、右傍「ふ」。
708　「すまのうらに」の「うらに」見せ消ち、右傍「あまの」、傍書に合点。
同　「風おいたみ」の「お」の右傍「を」。
709　「はふき」の「き」の右傍「木の或」（同筆）、傍書三字

の右傍に付点（見せ消ち）。

同　「みえぬれは」の「みえ」見せ消ち、右傍「なり」。

同　「たえぬことの」（ママ）の「こと」の右傍に付点（見せ消ち）、左傍「こ、ろ」、傍書に合点。

710　「た、こ、にのみ」の「のみ」見せ消ち、右傍「しも」。

711　「色ことにして」の「こ」の左に朱一点注記。

714　「そせい」の下に「法し」別筆補記。

717　「わすれなめ」の「わす」見せ消ち、右傍「はな」。

同　「そを」の「を」の右傍「ヲ」。

719　「われをうらんな」の「ん」見せ消ち、右傍「む」。

722　「そせい」の下に「法し」別筆補記。

同　「そこふかき」の「ふか」見せ消ち、右傍「ひな」。

同　「うはなみ」の「うは」見せ消ち、右傍「あた」。

728　「みをははなれは」の最後の「は」見せ消ち、右傍「ス歟」（同筆）、傍書に合点。

731　「はるのひの」の「のひ」見せ消ち、右傍「雨」。

同　「ふるひとみれは」の「み」見せ消ち、右傍「な」。

同　「ひちぬる」の「ひち」見せ消ち、右傍「ぬれ」。

732　「わたるらん」の「るら」見せ消ち、右傍「りな」。

733　「わたつみの」の「の」見せ消ち、右傍「と」、「と」に合点。

同　「あはに」の「はに」見せ消ち、右傍「わと」。

734　「むかへに」の「むかへ」見せ消ち、「か」と「へ」の間に小丸印、「し」補入（同筆）、初句右傍書「いにしへに」、傍書に合点。

735　「かりのなくをきゝて」の「な」の下「き」補記、「く」見せ消ち、右傍「ける」。

同　「人はしらすや」の「は」「らす」見せ消ち、「らす」の右傍「るらめ」。

736　「ないし」の右傍「典侍」。

737　「こむ院の」の次に小丸印、「右の」補入、左傍「能有文徳源氏　右大臣左大将」と注記。

739　「まてとはゝ」の「と」の下に小丸印、「い」補入。

740　「ゝ（の）ほるのあそん」の右傍「昇延喜八年二月中納言九年民部卿十四年大納言」と注記。

742　「ことつてのなき」の「の」「き」見せ消ち、それぞれ右傍に「も」「し」。

743　「なかめちるらん」の「ち」見せ消ち、右傍「ら」。

744 「あふまての」の「まて」に合点、右傍「用之」と注記、右傍「こと」、二字合点並びに見せ消ち、左傍「三本合」と注記。

同 「なにかせん」の「かせん」見せ消ち、右傍「せんに」。

746 「あた」の「た」の左に朱二点注記。

747 「こてう」の右傍「五条」。

同 「ほには」の「ほ」の下に小丸印、「い」補入。

同 「はかりになん」の「はかり」見せ消ち。

同 「かくれにけるに」の末尾の「に」見せ消ち。

同 「そこを」の「そ」と「こ」に顚倒符号。

同 「ゝ(を)もひいてゝ」見せ消ち、右傍「恋て三本合」、傍書に合点。

同 「もとのみにして」の「もとの」に合点、右傍「ヲナシ」、傍書見せ消ち。

749 「かけすけ」の上の「け」見せ消ち、右傍「ね」。

753 「くまもなく」の「くま」見せ消ち、右傍「雲」。

同 「なきたる」の「な」の左に朱一点注記、「き」の左に朱二点注記。

同 「あま」の「ま」見せ消ち、右傍「さ」、傍書に合点。

754 「めならふ色」の「色」見せ消ち、右傍「人」、「人」に合点。

同 「わすられにけん」の「にけ」見せ消ち、左傍「ぬら」、傍書に合点。

755 「みたるゝ」見せ消ち、右傍「なかるゝ」、傍書に合点。

756 「ぬるゝかほ」の「か」の左に朱二点注記。

760 「ふかめて」の「ふ」「か」「め」それぞれ左に朱一点注記。

761 「われそかすかくきみ」の右傍に顚倒を示すと思われる破線あり。左傍「きみかこぬよはわれそかすかく」、傍書に合点。

764 「こゝろは」の「は」見せ消ち、右傍「も」。

769 「さた」の「さ」の左に朱一点注記、「た」の左に朱二点注記。

同 「さたのゝほる」の下に割注「貞朝臣登／備中守　仁明御子」とあり。

同 「なかむるやとの」の「むるやとの」見せ消ち、右傍「めふるやの」、傍書に合点。

773 「いましはと」の「し」「は」ともに左に朱一点注記。

同　「わひしき」の「ひ」の下に小丸印、「に」補入、「き」見せ消ち。

774　「またるゝ」見せ消ち、右傍「こひしき」。

778　「すみのへの」の「へ」見せ消ち、右傍「え」。

780　「なりひら」の「り」見せ消ち、右傍「か」。

781　「雲林ゐんのみこ」の左傍「常康親王仁明御子」と注記。

同　「のかせをさむ」の「む」の下に小丸印、「み」補入。

783　「おのゝさたき」の下に「貞樹」と注記。

784　「おくりける」の「おくり」見せ消ち、右傍「つかはし」。

788　「ことくさそ」の「くさ」見せ消ち、右傍「のは」、傍書に合点。

789　「ふもとよりのみかへりきぬ」の「よりのみ」「きぬ」見せ消ち、右傍にそれぞれ「を見てそ」「にし」。

791　「まかりけれはのちに」の「れはのちに」見せ消ち（「に」の見せ消ちは誤り）、右傍「るみち」。

793　「たえぬ」の「え」見せ消ち、右傍「え」。本行「ら」に見えるため傍書で確認せるもの。

795　「もの」見せ消ち、右傍「色イ」。

796　「うたてにくけれ」の「にくけれ」に合点、右傍「かり」、傍書見せ消ち。

797　「いろみえて」の「て」の左に朱一点注記。

800　「きみかくれなは」の「く」見せ消ち、右傍「か」。

798　「よをうの花と」の「の花」見せ消ち、右傍「くひす」、傍書に合点。

802　「よみける」の「み」の下に小丸印、「てかき」補入。

803　「うしとて」の「て」の右傍「か」。

804　「つらゆき」の上に「きの」別筆補記。

807　「なをいこ」の右傍「直子」と注記。

同　「人は」の「人」見せ消ち、右傍「世を」。

808　「もとよし」の「し」見せ消ち。

同　「ひもしかな」の「し」見せ消ち。

809　「たゝおん」の右傍「忠臣」と注記。

812　「いとん」見せ消ち、右傍「もはら」。

814　「人そなき」の「人」見せ消ち、右傍「かた」。

818　「まさこを」の「を」見せ消ち、右傍「と」。

819　「かなしも」の「も」に合点、左傍「な」、傍書見せ消ち。

821　「草はの」の「はの」に合点、左傍「きそ」、傍書見せ消ち。

同「かはりけり」の末尾の「り」の左傍「る」、傍書見せ消ち。

824「よみひとしす」の「し」と「す」の間、右傍「ら」補入。

同「よそにそ」の「よそ」に合点、右傍「おと」、傍書右傍に付点（見せ消ち）。

825「人もかよはぬ……」に左傍書「又はこなたかなたに人もかよはす」（同筆、原態）。

826「あふことを」の「を」の右傍「は」。

828「よしの丶かはの」の「かは」に合点、左傍「タキ」、傍書見せ消ち。

1073「しまつ山ふり」の「ま」の右傍「は」、「は」の左に朱二点注記。

同「しつは山」の「つ」と「は」に顚倒符号。

同「かさしゆく」の「し」見せ消ち、右傍「タ」、「タ」見せ消ち、「く」の右傍「い」、「い」に合点。

1074「みむろに」の「むろ」の右傍「まゑ」、「まゑ」に合点。

1076「人もみるかね」の「か」の左に朱二点注記、「ね」の右傍「に」、「に」に合点。

同「山かつら」の「つ」の左に朱二点注記。